

後拾遺集の歌枕用法

—三代集との共通歌枕を通して—

渡 辺 輝 道

「袋草紙」上巻に、散佚した「後拾遺問答」によるものとされる次の記述が載せられている。

経信卿歌云

大井河岩波高し筏士よ岸の紅葉にあからめなせそ

後拾遺入之。而経信故礼部ニ乞請て出之。無下并歌也。為後見有恥。枉可止と云々。仍除之。

右の記述によれば、後拾遺集草稿本に自作の「大井河」歌が撰入されているのを見て、経信が「無下の棄歌で、後々までの恥になる」として、その削除を要請し、奏覧本では削除されたというのである。

これについて、上野理氏は、

「あからめ」に「をかし」をみる撰者と、これを「棄歌」とする

経信との相違は大きい。

といわれるが、⁽²⁾「大井河」歌についての、撰者藤原通俊の評価を説明するには、これではことは足らずというべきだろう。即ち、歌枕「大井河」に視点を置いたとき、次のようなことが考えられるのである。

「大井河」は三代集各集にも用いられる共通歌枕である。それらの用例を次に挙げる。⁽³⁾

けふ人をこふる心は大井河ながるる水におとらざりけり

(古今 二〇六 墨滅歌)

大井河うかべる舟のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり

(後撰 三三一 雑業平)

いろいろのこのはながるる大井河しもは桂のもみぢとや見ん

(拾遺 三三 秋忠岑)

大井河かはべの松に事とはむかかのみゆきやありし昔も

(拾遺 四五 雑貫之)

大井河くだすいかだのみなれざを見なれぬ水もこひしかりけり
(拾遺 六三 恋 不知)

みなかみにもみぢながれて大井河むらごにみゆるたきのしら
と (後拾遺 三四 秋 堀川右大臣)

みづもなくみえこそわたれ大井河きしのもみぢはあめとふれど
も (後拾遺 三五 秋 定頼)

おちつるもみぢをみれば大井河のせきに秋もとまるなりけり
(後拾遺 三七 冬 公任)

大井河ふるきながれをたづねきてあらしの山のもみぢをぞみる
(後拾遺 三九 冬 御製)

まつほどのすぎのみゆけば大井河たのむるくれをいかごとぞ思
ふ (後拾遺 四四 雑 馬内侍)

としごとにくせくとはすれど大井河むかしのなこそなはながれけ
れ (後拾遺 四六 雑 道濟)

「大井河」に「紅葉」を配するのは、『拾遺集』の忠岑歌が初例であるが、『後拾遺集』において「大井河」歌六首中四首と、「大井河」の「紅葉」の景は定着するのである。忠岑歌の眼目は、紅葉の景よりも下流にある地名「桂」にかけての「しもは桂のもみぢとや見ん」という機知的趣向にある。大井河の紅葉の景そのものを前面に歌うのは『後拾遺集』の発見だといっている。秋歌三六四・三六五番に続いて、三六六番に能因の「あらしふく三室の山のもみぢばは立田の川のにしきなりけり」を配列する撰者の意図は、紅葉の名

所「立田川」に代わる新名所「大井河」の提示にあったと考えられる。

『後拾遺集』が「大井河」歌を多く採集するのは、承保三年（一〇七六）一〇月二四日の白河天皇大井河行幸という行事を背景としていると考えられる。これは延喜の聖代の再現を庶幾する白河天皇の「昔のあとを興させ給ふこと多く侍りし」と『今鏡』がいう行事の一つで、『後拾遺集』撰集もその一環であることからして、撰者通俊としては「大井河」は格別の歌枕であったはずである。これと同様の現象は、後述する「住吉」歌と後三条院住吉御幸との関係においても見られる。

さて、上野理氏は、撰者通俊は伝統を重視する「歌めく」と、新しい創造である「めづらし」との背反する概念を統一するところに生まれる「をかし」の世界を和歌理念としていたとされるが、伝統的な歌枕に新景物を配することは、彼の理念を具現化する格好の方法ではなかったろうか。『古今集』以下の「大井河」歌を並べてゆくと、『後拾遺集』に至っての「大井河の紅葉」歌は一際鮮かな印象を与える。

このように見てゆくと、前の経信歌において、通俊が第一に評価したのは、「大井河」と「紅葉」との配合であって、この一首を加えることによって、秋部の印象をさらに強いものにしたのではなかったかと考えられる。経信が「棄歌」とする根拠が「あからめ」という新奇な表現にあり、それが通俊好みであったことを否

定することはないが、『袋草紙』の記述をめぐる解釈には、「大井河」という歌枕の三代集からの用法についての視点が必要だと思われるのである。

二

『後拾遺集』に用いられる歌枕で、三代集と共通するものは三二ある。それを次に示す。歌枕の下に数字は、上から『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』の用例数である。

飛鳥川	5 7 1 1	逢坂	10 21 6 17
近江	2 7 1 3	宇治	4 3 1 1
音羽山(川)	8 3 1 1	姨捨山	1 2 1 3
大荒木の森	1 2 1 1	大原野	1 1 2 3
大井河	1 1 3 6	鏡山	2 3 3 1
春日野	5 4 7 6	春日山	1 1 3 1
萬城山(久米路橋)	1 4 5 2		
賀茂	2 3 1 3	神奈備山(三室山)	6 2 4 1
鞍馬山(暗部山)	4 4 1 1	佐保川	1 2 4 1
須磨	3 2 2 3	住吉	8 13 18 16
末の松山	2 8 1 3	高砂	3 8 8 4
立田川	8 4 2 3	長柄の橋	4 2 2 5
難波	8 12 11 9	富士の嶺	5 6 3 1

堀江	1 2 1 2	三笠山	2 4 4 4
三輪山	3 1 3 3	吉野山	12 9 10 2
淀野	2 3 4 3	井手	1 1 2 3
小倉山	2 3 5 2		

各集ごとの用例数の合計は、『古今集』一一九 『後撰集』一四八 『拾遺集』一二二 『後拾遺集』一一五となり、『後撰集』がやや多いが、他の三集に大差はない。三代集の共通歌枕では特に大和関係のものが多く、その中『後拾遺集』では用いられなくなったものも多いことは既に述べたことがあるが、⁽⁷⁾ここでも飛鳥川、萬城山、神奈備山、佐保川、吉野山の用例が少なくなるのは同じ傾向のものと考えられる。

右の用例を各集ごとに部立別に整理すると次のようになる。

離別	部立集				
	春	夏	秋	冬	賀
	8	1	16	7	5
	8	5	10	6	1
	15	7	13	11	3
	12	5	11	5	4

計	御大 歌等所	雑 体	雑 體	哀 傷	恋	物 名	羈 旅
119	6	12	24	0	34	1	1
148	/	/	27	0	88	/	1
122	7 ※	/	25	0	33	5	/
115	0	/	45	2	21	/	6

(※神楽歌の用例数である。)

『後撰集』の恋歌、『拾遺集』の四季歌に特徴的な数値が見られるが、当面『後拾遺集』に限れば、羈旅の六例、恋の用例数の激減、雑の四五例が顕著な数を示すものとして注目される。まず羈旅の六例について考える。

石山よりかへりはべりけるみちに走り井にてしみづをよみ侍ける
堀川太政大臣

逢坂の関とはきけど走り井のみづをばえこそとどめざりけれ

(五〇〇)

ふねにのりて堀江といふところをすぎ侍とてよめる

藤原国行

すぎがてにおぼゆるものはあしまかな堀江のほどはつなでゆるべよ
(五〇二)

正月ばかりあふみへまかりけるに、鏡山にてあめにあひてよみはべりける
恵慶法師

鏡山こゆるけふしもはるさめのかきくもりやはふるべかりける
(五〇三)

七月ついたちころにをはりにくだりけるに、ゆふすずに
関山をこゆとしてしばらくるまをとどめてやすみはべりてよみ侍ける
赤染衛門

こえはてばみやこともとほくなりぬべし関のゆふ風しばしすずまん
(五〇四)

つくしへくだりけるに、みちにて須磨の浦にてよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

須磨の浦をけふすぎゆくとしかたへかへるなみにやことをつてまし
(五〇五)

越後よりのぼりけるに、姨捨山のもとに月あかりければ

橘為仲朝臣

これやこの月みるたびにおもひやる姨捨山のみもとなりける
(五〇六)

歌枕を实体经济することを尊重する風は、後拾遺時代後期を代表する能因あたりから興ったものであろうが、右歌の六人中後期歌人国行、為仲は、歌枕の実景を賞美し、歌枕の地に宿る感動を詠む。歌枕の実

景、実体験を評価する姿勢が『後拾遺集』羈旅部六首の根底にある。

住の江の岸による浪よるさへやゆめのかよひぢ人めよくらむ

(古今 五九 恋 敏行)

あしひきの葛城山にゐる雲のたちてもゐても君をこそおもへ

(拾遺 七九 恋 よみ人しらず)

音羽山おとにききつつ相坂の関のこなたに年をふるかな

(古今 四三 恋 元方)

富士の嶺をよそにぞきし今はわが思ひにもゆる煙なりけり

(後撰 二〇四 雑 朝頼)

恋歌に歌枕が詠み込まれるのは、右の例のように『万葉集』以来の伝統表現として序詞の中に用いられるか、また、例えば「逢坂の関」が逢うことのむつかしさを想起させるように、言語連想による比喩として用いられるのが基本的な用法である。これは、片桐洋一氏が、

土地（地名）という自然的事物事象について、特定の観念、特定の人事的事象を結合させてこそ歌枕となり得るということであるが、かような結合は「人事や自然を概念化し、それを一つの論理の中で説明しつくす」という古今集の表現の確立の中にこそ成り立ち得るものである。

⁽⁸⁾といわれるように、歌枕の本来的な用法であり、古今集の表現そのものでもあるのだが、『後拾遺集』の恋部の歌枕用例が激減すること、後拾遺集時代になって、少なくとも歌枕を用いる表現において、脱古今の傾向が現われてきていると考えると考えてよからうか。

これは前述の羈旅部に見られた、歌枕を実際の土地体験の次元で捉え直そうとする現象と同一線上に理解されるべき『後拾遺集』の特質といつてよいだろう。

『後拾遺集』の雑部用例については、歌枕「住吉」に顕著な特徴がある。「住吉」は『古今集』においては、賀1 恋4 雑3、『後撰集』では、春1 恋10 雑2、『拾遺集』夏1 秋1 恋8 雑5 神楽歌2の用例があり、三代集では恋歌を中心に用いられる歌枕といつてよいのだが、『後拾遺集』では、春1 賀1 恋2 雑12となつて、特に雑の用例が激増する。

延久五年三月に住吉にまゐらせたまひてかへさによませたまひける 後三条院御製

住吉のかみもあはれとおもふらんむなしきふねをさしてきつれば ⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

おきつかぜふきにけらしな住吉の松のしづえをあらふしらなみ ⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾ 民部卿経信

右の二首は、詞書にもあるように、延久五年（1093）二月（『後拾遺集』諸本の詞書は三月とする）の後三条院住吉御幸和歌から採られたものである。井上宗雄氏は、この住吉御幸和歌を「院政期歌壇の出発点」とし、⁽⁹⁾上野理氏は「白河朝の和歌行事は、住吉御幸和歌にはじまる」と位置づけられるように、⁽¹⁰⁾『後拾遺集』撰集への道の出発点であり、撰者通俊が歌人として晴れの場にはじめて登場した ⁽¹¹⁾

記念すべき行事であった。前述した「大井河」が『後拾遺集』にお

いて重視されたと同様の背景が「住吉」にもあったのである。この時、左中弁実政の出した題は「行旅述懷」であり、院の詠に応じて、從駕の臣、女房が詠んだ歌数は四四首にのぼる。⁽¹²⁾ほとんどの歌は、賀意をこめて「住吉」とその景物「松」を詠むが、

ひさしくもなりにけるかな住の江の松はくるしき物にぞありける
(古今 七六)

白浪のよるよる岸に立ちよりてねも見しものを住吉の松

(後撰 五九)

住吉の松ならねどもひさしくも君とねぬよのなりにけるかな

(拾遺 七四)

といった三代集に多く見られる掛詞、縁語、比喻素材としての「住吉」の用法は見られない。この時の和歌で『後拾遺集』に採られたのは前引の二首のみであるが、とりわけ経信の歌は、叙景に徹した名歌として、『栄花物語』巻三八の巻名の由来にもなったのである。

こうした背景とともに『後拾遺集』が撰歌対象とした時代が、住吉参詣が盛行した時代であり、当然「住吉」を詠み込んだ多くの歌が撰歌資料にあっただろうことを考えると、「住吉」歌の用例が集に多いことの説明がつくと思う。注意すべきは、ここでも三代集的な歌枕「住吉」の用法が激減することであった。「住吉」は多くの人にとって実体験の土地になったのである。

三

前節で『後拾遺集』中の三代集との共通歌枕の用例数のあり方をめぐって、一部その用法についてをも含んで考えたのであるが、以下、歌枕の用法について具体的に見てゆく。

歌枕の用法については、小町谷照彦氏が五類に分けておられるが、筆者は二種四類、さらに第三、四類をそれぞれ二項に分類するのがよいかと思う。

第一種 景物・イメージ用法

甲類 特定景物と結びつく用法

乙類 特定イメージをもった用法

第二種 言語連想・修辭的用法

丙類 掛詞用法

イ項 直接的掛詞用法

ロ項 間接的掛詞用法

丁類 序詞用法

ハ項 同音反復用法

ニ項 意味的用法

△第一種甲類 特定景物と結びつく用法▽(※印は、新景物。数字

は、後拾遺集歌番号)

逢坂一駒278, 279, 280 ※ 風511 清水632, 741 関守676 鶏939

近江—みるゑ 717, 830
 宇治—網代・氷魚 386
 姨捨山—月 533, 848, 1091
 大荒木の森—下草 228
 大原野—雪 1118 姫小松 437
 大井河—紅葉 364, 365, 377, 379
 鏡山—春雨 510
 春日野—雪・若菜 34, 35, 1112, 1113 朝霧 1114
 春日山—松 452
 葛城山—月 261
 賀茂—千鳥 1014 ゆふたき 1080
 神奈備山(三室山)—紅葉 366
 鞍馬山(暗部山)—月 850
 佐保川—霧・千鳥 388
 須磨—あま・丹 652 藻塩煙 1054
 住吉—藤波 156 松 156, 446, 719, 740, 987, 1063, 1065, 1068
 1069, 1167, 1175, 1176, 塩草 1066
 高砂—松 282, 985 鹿 282, 287
 立田川—卯の花 176 柳 220 紅葉 366
 難波—芦 44, 49, 596 千鳥 389
 富士の嶺—白雲 825
 堀江—芦 476, 506

三笠山—朝霧 1114
 三輪山—杉 738, 739, 940 月 940
 吉野山—霞 5 桜 121
 淀野—あやめ草 212 みまぐち 685 ははこ草 1203
 井手—山吹 157, 965 蛙 159
 小倉山—紅葉 232 鹿・夕霧 292
 四集共通歌枕において、例えば『拾遺集』の提示した新景物が、逢坂—駒、春日野—八少女、吉野山—霞、小倉山—紅葉ぐらいであることと比較すると、『後拾遺集』が右に示したような多くの新景物をそれぞれの歌枕に配したことは刮目に値する。歌枕と景物が三代集で歌い古され固定化し、新鮮さを失っていった結果、それぞれの歌枕は新景物によって再活性化を図らねばならない時期に来ていたとも考えられる。その典型が「立田川」であろうか。

うのはなのさけるさかりはしらなみの立田の川のるぜきとぞみ
 る (二女 夏)
 なつころも立田川はらのやなぎかげすすみにきつつならすころ
 かな (三三 夏)
 あらしふく三室の山のもみぢばは立田の川のにしきなりけり
 (三六 秋)

三六六番歌は能因法師の代表歌の一つだが、この歌について、糸井通浩氏は、
 当時、紅葉への興味が、その地をもつぱら大井河、嵐山に集中し

てきているのに対して（中略）能因は「紅葉の錦」は南京の趣きこそ日本の美意識ですぞと言いつき出さずにはいらなかったにちがいない。それが歌枕を愛する能因の面目であった。

と述べられる。⁽¹⁴⁾とすると、この時点では「立田川―紅葉」は、新歌枕と景物を提示したと同じ新鮮さを与えたということになるうか。

一七六・二二〇番歌のように季節を変え、新景物を配して「立田川」に新しいイメージを与えようとする工夫とともに、後拾遺集時代の歌枕についての人々の認識を考える糸口を「立田川」は与えてくれていると思われる。

また、前述したように恋歌に歌枕が激減することとも関連する現象と見てよいと思われるが、三代集で恋歌の歌枕であったものが、四季や羈旅歌に用いられることが一例えば、逢坂 511 宇治 386 葛城山 261 住吉 156 堀江 506 淀野 212 ―必然的に新景物を生み出すことにもなっている。新景物を開拓できなかった―別の視点からいえば、最も安定した―歌枕については、「住吉」を除いてその用例が減少するのが全体的傾向である。

△第一種乙類 特定イメージをもった用法▽

飛鳥川―瀧瀬定まらず 696

近江―みるめな 717, 830

娘捨山―娘捨山伝説 533, 848, 1091

葛城山―葛城神の伝説 261, 758

末の松山―波越えず 705, 770

高砂―いたづらに世を経る 986

長柄の橋―古りぬるもの 426, 1073, 1074

「特定イメージ」は、古歌、伝説、一般の通念などによって作られたものであるから、景物歌枕のように、新景物によって新しい表現を拓くようなことは難しい。四集共通歌枕によって四集の用例を数えると、「古今集」一七『後撰集』三〇『拾遺集』一〇⁽¹⁵⁾『後拾遺集』一四となつて、『後撰集』が突出し、『拾遺集』で激減することが注目される。即ち、これらの歌枕は、固定化したイメージによって類型的発想を生み易く、「襲」の歌の恋歌の素材として多く用いられる傾向があつたことを窺わせる。類型的発想は表現の行き詰まりを必然的に招く。それが拾遺集時代に現われたと見るべきか、晴れの歌の集の性格を強く持つ『拾遺集』が「襲」的素材を排除したと考えるべきかであろう。『後拾遺集』で用例がやや増えるが、次の歌のような新しい視点からの工夫が出て来ているためと考えられる。これやこの月みるたびにおもひやる娘捨山のふもとなりける

(五三) 羈旅)

いにしへの月かかりせば葛城の神はよるともちぎらざらまし

(三三) 秋)

くちもせぬ長柄の橋のはしはしらひさしきほどのみえもするかな
(四六) 賀)

四二六番兼盛歌は、長柄の橋の「古りぬるもの・こと」の負的イメ

「ジを「久しきこと」の正イメーに交えて、賀歌の素材として
いるところに新しい発想が見られよう。

四

△第二種丙類 掛詞用法▽

イ項直接的掛詞用法とは、歌枕が掛詞として一首の表現の中に組
み込まれているものをいう。

これやこのゆくも帰るも別れつつしるもしらぬもあふさかの関

(後撰 10た)

限なく思ひながらの橋柱思ひながらに中やたえなん

(拾遺 八四)

ロ項間接的掛詞用法とは、歌枕が直接に掛詞として一首表現に組
み込まれてはいないが、掛詞的に連想される意味が、一首の成立に
関わっているものをいう。

人しれぬ身はいそげども年をへてなどこえがたき相坂の関

(後撰 三三)

こむといひし月日をすぐす姨捨の山のはつらき物にぞ有りける

(後撰 五四)

この場合「相坂の関」は、恋人に逢うこと、「姨捨の山」は、捨て
られることを掛詞的に連想させて、一首の意味に関わっているの
である。

小町谷氏の分類項目「掛詞によって別な意味内容を連想するもの」
がイ項に、「歌枕を形成している言葉から他の物や性格を予想する
もの」がロ項に、大体相当するかと思うが、小町谷氏のあげておら
れる用例を筆者の分類基準で点検すると、異同が出るので、次にイ
項、ロ項については、三代集の用例を合せて示す。

△イ項 直接的掛詞用法▽

コ＝古今集 セ＝後撰集
シ＝拾遺集 ジ＝後拾遺集

飛鳥川―「明日」コ341

逢坂(の関)―「会ふ」コ634,1004,1107 セ1088 シ315

コ676,723 「塞へ」セ859,984

近江―「逢ふ身」コ369 セ785,843,858,859,875,972 コ644,

717

宇治―「憂し」コ825,983 シ843 「内」セ1359

大井河―「多し」コ1106

鞍馬山(暗部山)―「比ぶ」コ590 セ867

須磨―こり「ちせ」セ800,865

住吉(住の江)―「住み」セ1022 シ573 「住みよ」コ917

セ597 シ462,539 コ719

末の松山―「待つ」セ522,755,759

高砂―「高し」セ373,1058 シ998

立田川―「立つ」コ629

「裁」コ220

長柄の橋―「…なから」シ864 コ1072,1074

難波―「何は」コ696

「名ひち」コ918 セ1201 シ977

「なひせのひ」コ595,719,1073,1197

富士の嶺―「音」セ565

三笠山―「御笠」コ1010 セ1028,1029

シ547,1056,1191

三輪山―「見」コ738

淀野―「夜殿」セ914 コ212,1201

「そひち」セ994

井手―「居む」コ964

〈ロ項 間接的掛詞用法〉

飛鳥川―「明日」セ526

逢坂（の関）―「逢ふ」コ374,390,473

セ516,731,732,802,981,1038,1074,1303 シ314

コ632,748,915,937,939,941

音羽山―「音」コ384,749 セ158,251,1261

娘捨山―「捨ひふね」セ542 コ1091

鏡山―「鏡」コ899,1086 セ393,405 シ73,606,613

鞍馬山（暗部山）―「暗」コ39,195,295 セ271,832,1140

シ1016 コ850

住吉―「住む」コ1066

三笠山―「御笠」セ715 コ1178

淀野―「夜殿」コ685

小倉山―「小暗」コ312 セ196,1231

シ128,135,195 コ232,292

イロ項の用例を集毎に合計すると、次のようになる。

項	集			
	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集
イ項	14	26	11	16
ロ項	11	21	8	13
計	25	47	19	29

片桐洋一氏は、名所歌枕は「単なる地名ではなく、特定の人事的觀念が結合した地名である」と定義され、それは「古今集の表現の確立の中にこそ成り立ち得るものである」といわれるが、この掛詞用法は、まさにその典型である。歌枕から掛詞的に連想されるものが人事的事象である以上、この用法は、恋歌、雑歌に多く用いられるのは必然的であり、右の用例もその大半が、恋、雑部のものである。恋歌を中心とした藁の集といわれる『後撰集』に特に用例が多いのは当然として、『拾遺集』の用例が少ないことが注目される。『拾

遺集』が万葉集歌を多く入集させ、また、『後撰集』とは対照的に晴れの歌を中心に撰集されていることが、その原因だろうか。鴨長明が『無名抄』で「拾遺ノ比ヨリ其体事ノ外ニ物デカクナリテ、コトワリクマモナクアラハレ、スガタスナホナルヨロシトス。」⁽¹⁸⁾と述べることも関わってゆくことと思われる。ただ、小町谷氏が、全歌枕の用例合計では、イ・ロ項にあたるものが三代集で次第に増加している⁽¹⁹⁾と指摘されていることを考えると、この問題は稿を改めて再検討しなければならない。

『後拾遺集』の用例について見ると、イ項では、「住吉」「長柄の橋」「難波」の用例が一六例中七例を占める。摂津の国の歌枕を開拓し、盛んに詠んだのは後拾遺集時代の特徴であつた。⁽²⁰⁾

また、この用例に特徴として見られることは、二・二番作者大中臣輔弘、七三八番皇太后宮陸奥を除いて、他の一四首の作者が総て、上野理氏が後拾遺集時代第一期二期とされる時期⁽²¹⁾に属することである。第三・四期の真の後拾遺集時代の歌人には、この掛詞用法はあまり尊重されなかつたといえようか。

イ項の直接的掛詞用法が、歌枕から連想される人事的事象が一首の表現に直接組み込まれるものである故に、恋・雑歌に用いられることが必然的に多かったのに対し、ロ項は、掛詞によって連想される意味、イメージが、比較的自由独立に一首に機能することから、用例も四季歌・恋歌・雑歌と多岐に現われるのが特徴である。また、そのような用法であるだけに、いつの時代にも用いられる可能性を

持つ。

ロ項の用例一三例中、一・二期は六例、三期七例であつて、イ項のような偏りはない。四期歌人である撰者通俊の自撰歌五首中、歌枕を詠み込むのは次の二首である。

ん

(三六)

あなしふくせとのしはあひにふなでしてはやくぞぐる佐屋形山を
(五三)

「舟木山」「佐屋形山」とともに新歌枕であるが、「舟」「屋形」を連想させるロ項に該当する用例である。この用法は後拾遺集時代全期に渡って用いられたことがわかる。

△第二種丁類 序詞用法△は、序詞の一般的な用法分類に従つてさらに、ハ項 同音反復用法、ニ項 意味的用法に分けられる。ハ項については『古今集』に八例、『後撰集』一例、『拾遺集』五例が見られるが、『後拾遺集』では一例。

あふことをいまはかぎりとし三輪の山すぎのすぎにしかたぞ恋しき
(七三)

ニ項については、『古今集』に五例、『後撰集』七例、『拾遺集』三例があり、『後拾遺集』では五例、まつほどのすぎのみゆけば大井河たのむるくれをいかとぞ思ふ
(九〇)

三笠山さしはなれぬといひしかどあめもよにとはおもひしものを
(三七)

ふかきうみのちかひはしらず三笠山心たかくもみえしきみかな
(二四)

須磨のあまのうらこぐふねのあともなくみぬ人こふるわれやな
になり
(三五)

ととのへし賀茂の社のゆふだすきかへるあしたぞみだれたりけ
る
(四〇)

前三例は枕詞ともみられる用法だが、今はここに入れた。二四番作者堀川右大臣を除いて他は一・二期歌人のものである。後拾遺集時代においては、序詞表現は遠いものになりつつあるといえようか。

五

以上、三代集との共通歌枕を通して『後拾遺集』の歌枕用法に見られる特色を考えてきた。時代が晴れの歌の時代を迎えて、歌人たちに文芸意識が強く自覚されるようになれば、個性的な新しい創造が、和歌表現においても最も重要な評価対象になる。そのような風潮の中で、歌枕という本源歌や一般通念といった伝統の力の束縛が最も厳しい領域において、どのような変化が現われるのか。それを四集に共通して用いられているという最も安定した歌枕にあえて限定して、そこに見られる『後拾遺集』の新傾向を見てみた訳である。い

くつかの特色に通底するものは、脱三代集を指向する『後拾遺集』の新しい試行であったといえようか。しかし、今回の考察過程で数値的には『拾遺集』にさらに検討すべき問題があることが明らかにしたが、それは別稿を期したい。

上野理氏は、撰者通俊が、六人党の新風の正統な継承者を自他共に許す時の歌壇の長老源経信に反撥し、歌壇の前衛であろうとして、『古今集』的なものへ回帰したとされるが、彼が単独で撰集した『後拾遺集』を見る限り、脱古今的な傾向をより多く指摘出来ると思う。そうした傾向は、『古今集』的なものへ回帰したとするよりも、通俊は、新風と『古今集』的なものとを止揚するところに新しい歌の世界を目指したと考えることによって、説明できるのではないかと思う。しかし、このことは『後拾遺集』をさらに多角的に考察することによって証明すべきことで、現段階ではまだ仮説にすぎない。

注

- 1 日本歌学大系本による。漢字は新字体に改めた。
- 2 『後拾遺集前後』第七章。正宗敦夫氏は『金葉集講義』で、経信が固辞した理由を、やはり「あからめ」を中心に述べておられる。
- 3 以下「八代集」の用例は、『新編国歌大観』による。歌番号も新番号によった。表記は一部改めたものもある。

4 「釣せぬ浦々」

5、21、22 『後拾遺集前後』第七章。

6、16、19 三代集については小町谷照彦「三代集の名所歌枕」(常葉女子短期大学紀要⁶ 1 昭和四三年)を参照した。但し、用例数については、重出歌は一とし、誤りと思われるものは訂正しているので一部相違がある。

7、20 拙論「名所歌枕からみた後拾遺集」(高知大国文第一号 昭和五五年)

8、17 「歌枕の成立―古今集表現研究の一部として―」(国語と国文学 昭和四五年四月)

9 「院政期歌壇の考察」(国文学研究 第一九集 昭和三四年三月)

10 『後拾遺集前後』第三章に「住吉御幸和歌」について詳説されている。

11 近藤潤一「藤原通俊の和歌―附藤原通俊年譜―」(帯広大谷短期大学紀要 第四号)

12 『栄花物語』卷三八「松のしづえ」

13 注6の「三代集の名所歌枕」及び「歌枕」(月刊文法 昭和四四年二月)

14 「「なりけり」構文―平安朝和歌文体序説」(京教大附高研究紀要第VI号 昭和四四年)

15 三代集については、注6の論文の用例を参照したが一部

改めている。

18 日本歌学大系本による。

(高知大学教授)